

玄奘三蔵不東の御精神

令和三年五月法話 薬師寺 管主 加藤朝胤

唐三蔵法師玄奘 大唐三蔵大遍覺 大唐大慈恩寺玄奘三蔵大菩薩

『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』十卷 慧立本・彦惊箋

『玄奘三蔵―大唐大慈恩寺三蔵法師伝』永澤和俊 光風社出版(昭和63年1986)

誕生 開皇二十年(600) 仁寿二年(602) 説あり

洛陽 陳架村 父陳慧 兄長捷 諱(俗名)陳緯

試験官 鄭善果 度の採用試験

出家 大業八年(612) この頃出家して洛陽浄土寺に住む

出国 貞観元年(627) 秋 貞観三年(629) 説あり

『瑜伽師地論』を求めて印度求法の旅

冬 高昌国 麴文泰の供養

ナールンダ戒頭論師に唯識を学ぶ

貞観十八年(644) 春 于闐(コータン) から上表

太宗皇帝に帰国の勅許を請う

長安に到着

貞観二十年(646) 七月『大唐西域記』十二卷

貞観二十二年(648) 五月『瑜伽師地論』百卷 弥勒菩薩造

貞観二十二年(648) 『唯識三十頌』

貞観二十三年(649) 『般若波羅蜜多心経』

永徽二年(652) 大雁塔建立

顯慶四年(659) 『成唯識論』十卷 合糅訳

顯慶五年(660) 一月一日〜龍朔三年(663) 十月

『大般若経』六百卷 四八〇万文字

麟徳元年(664) 二月五日夜半玉華宮にて神逝

旅立ち

不東の精神 嘉峪関 ゴビ砂漠(塩鹹ゴビ) 高昌国 麴文泰
ヒマラヤ山 天山山脈 ペダル峠 アムダリヤ川 バーミヤン
ガンダーラ ナールンダ大学 護法菩薩 戒頭論師 合糅訳

翻訳

竺法護 (二三九〜三二六) 一七五部 三五四卷
鳩摩羅什 (三四四〜四一三) 七四部 三八四卷
真谛 (四九九〜五六九) 四九部 一四二卷
玄奘 (六〇二〜六六四) 七五部 一三三五卷
義浄 (六三五〜七一一) 六一部 二二九卷
不空 (七〇五〜七七四) 一一〇部 一四三卷

三蔵 經蔵

律蔵

御頂骨の発見

- 昭和十七年 十二月二十三日 中国 南京 雨花台 高森部隊発見
- 昭和十九年 十二月二十三日 上野 寛永寺 霊骨恭迎法要
- 昭和二十五年 三月二十日 埼玉県岩槻市 慈恩寺 大島見道師 霊骨塔建立
- 昭和五十六年 四月五日 御頂骨の分骨
- 昭和五十九年 十一月十八日 玄奘三蔵院伽藍の建立起工式
- 平成三年 三月二十日 薬師寺玄奘三蔵院伽藍落慶式
- 平成十二年 十二月三十一日 大唐西域壁画奉納 平山郁夫画伯

玄奘三蔵将来品

- ① 釈迦如来の肉舍利百五十粒
- ② マカダ国前正覺山龍窟留影の金佛像一軀 光座を通じて三尺三寸
- ③ パラナシ国鹿野苑初転法輪像を模刻刻檀の佛像一軀 光座を通じて三尺五寸
- ④ カウシャンビー国ウダヤナ王が如来を思慕し梅檀に刻した佛像一軀 光座を通じて二尺九寸
- ⑤ カピタ国に如来が天宮から宝階を下降される像を模した銀の佛像一軀 光座を通じて四尺
- ⑥ マカダ国鷲峰山に『法華経』などを説かれる像を模した金の佛像一軀 光座を通じて三尺五寸
- ⑦ ナガラハラ国に毒龍を調伏し留められた影像を模した刻檀の佛像一軀 光座を通じて一尺五寸
- ⑧ ヴェーシャーリイ国に城を巡って行化する影像を模した刻檀の像
- ⑨ 法師が西域に於いて得た『大乘経』二百二十四部
- ⑩ 『大乘論』百九十二部
- ⑪ 『上座部経律論』十五部
- ⑫ 『大衆部経律論』十五部
- ⑬ 『三弥底部経律論』十五部
- ⑭ 『弥沙塞部経律論』二十二部
- ⑮ 『迦棄臂耶部経律論』十七部
- ⑯ 『法蜜部経律論』四十二部
- ⑰ 『説一切有部経律論』六十七部
- ⑱ 『因論』三十六部
- 『声論』十三部

総計 五百二十夾六百五十八部

『大唐大慈恩寺三藏法師傳』 十卷 慧立 彦棕

①是れより已去は、即ち莫賀延蹟なり。長さ八百余里。古に沙河と曰ふ。上に飛ぶ鳥無く、下に走る獸無し。復た水草も無し。是の時影を顧るに唯だ一なるのみ。但だ観音菩薩及び般若心經を念す。…中略…

②沙河の間に至り、諸々の悪鬼に逢ふ。奇状異類にして、人の前後を遶る。観音を念すと雖も去らしむること能はず。此の般若心經を誦するに及び、声を發して皆な散す。危きに在りて濟はるるを獲たるは、実に焉に憑る所なり。

③時に行くこと百余里にして道を失ふ。野馬泉を覓むるも得ず。水を下し飲まんと欲するも、袋重く手を失ひ之を覆へず。千里の行資、一朝にして斯に罄く。又路を失ひて盤迴し、趣く所を知らず。乃ち東歸して第四烽に帰らんと欲す。

④行くこと十余里にして自ら念ふ。「我先に發願す。若し天空に至らざれば、終に東歸すること一歩もせず。今何の故に來たる。寧ろ西に就きて死すべし。豈に東に歸りて生きんや」と。是に於て轡を旋らし、専ら観音を念し、西北して進む。

⑤是の時、四顧するに茫然として人鳥俱に絶ゆ。夜は則ち妖魘の火を挙げ、爛ること繁星のごとく、昼は則ち驚風の沙を擁し、散すること時雨のごとし。是くの如きに遇ふと雖も、心に懼る所無し。但だ水の尽くるを苦しむのみ。渴きて前むこと能はず。

⑥是の時、四夜五日、一滴の喉を沾すもの無し。口腹乾燥し、幾んど將に殞絶せんとす。復た進むこと能はず、遂に沙中に臥す。観音を默念して、困ずると雖も捨てず。

⑦第五夜の半に至り忽ち涼風有り。身に触れ冷快なること寒水に沐するがごとし。遂に目の明くるを得、馬も亦た能く起つ。体既に蘇息し少しく睡眠するを得。即ち睡中に於て一大神を夢みる。長さ数丈、鞍を執り、鷹きて曰く。「何ぞ強行せずして、更に臥するや」と。法師驚寤して進發す。

⑧行くこと十里可りにして、馬忽ち路を異にす。之を制するも迴らず。數里を経て忽ち青草の數畝なるを見る。馬を下りて、恣に食はしむ。草を去ること十歩、迴転せんと欲するに、又一池水に到る。甘澄鏡澈たり。即ち就きて飲む。身命重ら全うし、人馬俱に蘇息を得る。

⑨此れを計るに、応に旧の水草に非ず、固よりはれ観音菩薩の慈悲の生ずるところなるべし。其の至誠の神に通ずること、皆な此の類なり。即ち草池に就きて一日停息す。後日水を盛り、草を取りて進發す。

玄奘法師 経年代表

經名	卷數	譯經年	月日	譯經地點	
大菩薩藏經	二十	貞觀十九年	紀元六四五年	五月二十日到九月二日	弘福寺翻經院
顯揚聖教論	一		六月十日		
六門陀羅尼經	一		七月十四日		
佛地經	一		七月十五日		
顯揚聖教論	二十		十月一日到次年正月十五日		
大乘阿毘達磨雜集論	十六	貞觀二十年	紀元六四六年	正月十七日到三月二十九日	
瑜伽師地論	一百		五月十五日到十二月十五日		
大唐西域記	十二		七月		
大乘五蘊論	一	貞觀二十一年	紀元六四七年	二月二十四日	
攝大衆論無性釋	十		三月一日到二年六月十七日		大慈恩寺翻經院
解深密經	十五		五月十八日到七月十三日		弘福寺
因明入正理論	一		八月六日		
天請問經	一	貞觀二十二年	紀元六四八年	三月二十日	
勝宗十句義論	一		五月十五日		
唯識三十論	一		五月二十九日		玉華寺慶福寺
能斷金剛經	一		十月一日		
大乘百法明門論	一		十一月十七日		北闕弘法院
攝大衆論世親釋	十		十二月八日到次年六月十七日		
攝大衆論本	三		四年十二月二十六日到次年六月十七日		
阿毘達磨識身足論	十六	貞觀二十三年	紀元六四九年	正月十五日至八月八日	北闕弘法院及慈恩寺
如來示教勝軍王經	一		二月六日		慈恩寺
緣起聖道經	一		正月一日		北闕弘法院
甚希有經	一		五月十八日		終南山翠微宮
般若心經	一		五月二十四日		
菩薩戒羯磨論	一		七月十五日		慈恩寺
王法正理論	一		七月十八日		
最無比經	一		七月十九日		
菩薩戒本	一		七月二十一日		
大乘掌珍論	二		九月八日		
佛地經論	七		十月三日至十一月二十四日		
因明正理門論	一		十二月二十五日		
稱讚淨土佛攝受經	一	永徽元年	紀元六五〇年	正月一日	
瑜伽師地論釋	一		二月一日		
分別緣起初勝法門經	二		二月三日		
無垢稱經	六		二月八日至八月一日		
藥師琉璃光如來本願經	二		五月五日		
廣百論本	一		六月十日		
大乘廣百論論	十		六月二十七日至十月二十三日		

經名	卷數	譯經年	月日	譯經地點	
本 事 經	七		九月十日至十一月八日		
諸佛心陀羅尼經	一		九月二十六日		
受持七佛名號所生功德經	一	永徽二年	紀元六五一年	正月九日	
大乘大集地持十輪經	十		正月二十三日至六月二十九日		
阿毘達磨藏顯宗論	四十		四月五日至次年十月二十日		
阿毘達磨俱舍論	三十		五月十日至五年七月二十七日		
俱舍論本頌	一		同 上		
大乘成業論	一		閏九月五日		
大乘阿毘達磨集論	七	永徽三年	紀元六五二年	正月十六日至三月二十八日	
佛臨涅槃記法住經	一		四月四日		
阿毘達磨順正理論	八十	永徽四年	紀元六五三年	正月一日至五年七月十日	
阿毘達磨攝論	一	永徽五年	紀元六五四年	閏五月十八日	
稱讚大乘功德經	一		六月五日		
拔濟苦難陀羅尼經	一		九月十日		
八名菩薩陀羅尼經	一		九月二十七日		
顯無邊佛上功德經	一		九月二十八日		
勝幢寶印陀羅尼經	一		九月二十九日		
持世陀羅尼經	一		十月七日		
十一面神咒心經	一	顯慶元年	紀元六五六年	三月二十八日	
大毘婆沙論	二百		七月二十七日至四年七月二日		
阿毘達磨發智論	二十	顯慶二年	紀元六五七年	正月二十六日至五年五月七日	
觀所緣緣論	一		十二月二十九日	大內順賢閣及玉華宮	
入阿毘達磨論	二	顯慶三年	紀元六五八年	十月八日至十三日	慈恩寺
不空罽索神咒心經	一	顯慶四年	紀元六五九年	四月十九日	
阿毘達磨法蘊足論	十二		七月二十七日至九月四日		
成唯識論	十		閏十月	玉華寺雲光殿	
大般若經	六百	顯慶五年	紀元六六〇年	正月一日至龍朔三年十月二日	
阿毘達磨品類足論	十八		九月一日至十月二十三日	玉華宮雲光殿	
阿毘達磨集異門論	二十		十一月二十六日至龍朔三年十二月二十九日	玉華宮明月殿	
辯中邊論頌	一	龍朔元年		五月一日	
辯中邊論	三		紀元六六一年	五月十日至三十日	
唯識二十論	一		六月一日	玉華寺慶福殿	
緣起經	一		七月十九日	玉華寺八桂亭	
異部宗輪論	一	龍朔二年	紀元六六二年	七月十四日	玉華寺慶福殿
阿毘達磨界身足論	三	龍朔三年	紀元六六三年	六月四日	玉華寺八桂亭
五事毘婆沙論	二		十二月三日至八日	玉華寺玉華殿	
寂照神變三摩地經	一		十二月二十九日	慈恩寺	
咒 五 首 經	一	麟德元年	紀元六六四年	正月一日	